

「文」の足音

葛巻高等学校 二年 宮本 里桜

「文」というものは、なんだか自分の中では自由なやつだと思えます。

「文」には様々な読み方があって、「文」という言葉自体が歩き始めそうな感じがするのです。自分の考える「文」というやつは、文字の形がまるで足が生えているみたいで、よきによき、歩き出しそうな気がするのです。そして「文」にはさまざまな読み方があり、自分はその足音みたいに感じました。

たとえば自分は、幼いころから勉強があまり好きではないのですが、物語を読むこと、創ることは大好きでした。物語は「文」章でできているので、「ぶん」という足音で、自分といつも一緒に歩いてくれている気がして、時には助けられました。「ぶん」というやつ、妙に頼もしいのです。

でも、自分の中でちよつと納得のいかない「文」もいました。

幼いころ、自分は新たな「文」に出会ってしまいました。それは、「もん」です。

自分は「もん」の足音のあまりの間抜けさに、少しというか、かなりショックを受けました。「ぶん」はあんなに頼もしいというのに、「もん」のなんとの間抜けさ。もやもやしていて、なよなよしていて、女々しい感じがするのです。

しかし自分は、そんな「もん」に惹かれてしまいます。気になって様々な言葉を調べると、「もん」というやつは、それほどなよなよしている奴ではなかったのです。自分はまず、縄文土器を知りました。縄文土器の「文」は「もん」なのです。縄文土器は、縄の模様がついた土器です。縄文土器という言葉、「文」がなければ縄文土器です。縄文土器って訳が分からないと思いませんか。全然役に立たなそうじゃないか、と自分は思いました。縄文土器という言葉には、「文」が、「もん」が必要不可欠なのです。他にも「もん」というやつを調べると、呪「文」だとか、昔の銭貨の単位「文」だとか、「もん」というやつ、結構知的で大事なやつだったのです。間抜けだとか、なよなよしているとか考えて、とても申し訳なくなってしまうました。

「文」というやつは、知れば知るほど非常に自由で、大切に、面白いもので、自分は「文」が大好きで、たまに嫌いになったり、仲直りしたり、新しく学んだりしながらこれからも「文」と歩いていくのです。